



地味チョウシリーズ⑨

ツマジロウラジャメ

Lasiommata deidamia

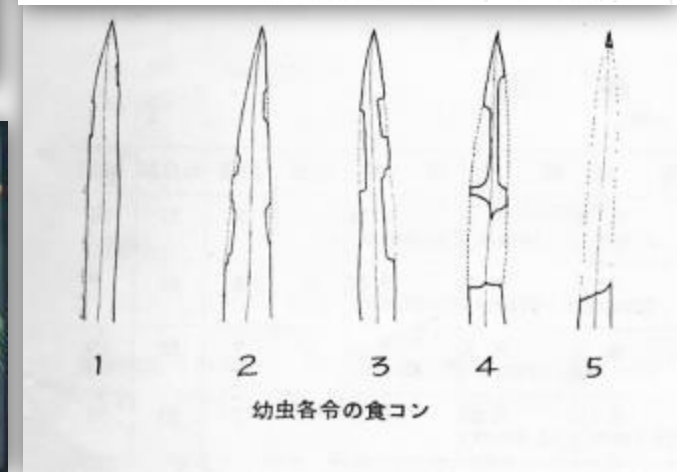
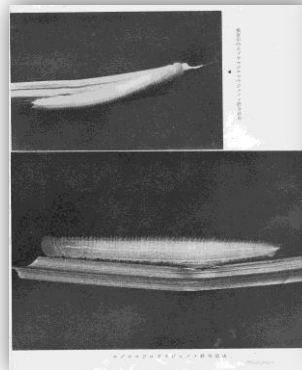
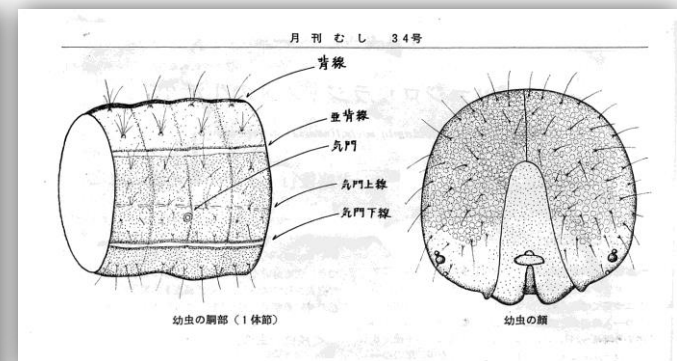
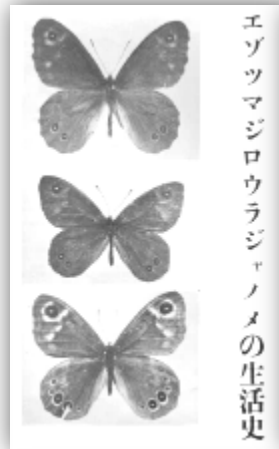


はじめに～エゾツマは高嶺の蝶～

エゾツマは地味チョウシリーズにはふさわしくない珍品ではあります。私にとっては、長らく、深山幽谷に棲む雲の上のような存在でした。そのチョウが虫研時代に渡辺御大によって私の手に渡されました。時は1973年、もう半世紀前の話です。渡辺さんが日高の幌尻岳でエゾツマのメスから採卵した卵を永盛兄弟に飼育を託したのです。エゾツマなんて見たこともない珍チョウ。なんとか羽化(5齢で蛹化し、2化が出た)まで持っていけたので、その飼育経過を兄も含めて三人で「月刊むし」に発表したのです。そのときは別種説もあり結構丁寧に記録した覚えがあります。(写真下)

羽化した成虫を見ると前翅の白紋が黄色身を帯びて連続的に繋がる等、本州のツマジロと形態が違うように見え、幼生期も含め本州との違いを強調して書いています。別種説はその後交配実験で否定されました。ただ、エゾツマは原名亜種で本州や四国のものは別亜種となっています。

なお、この報文はバイブル「生態図鑑」に紹介(渡辺さんが執筆)されてちょっとうれしかったものでした。ただ、このとき野外での食草として紹介したアポイタヌキランは誤認でした。



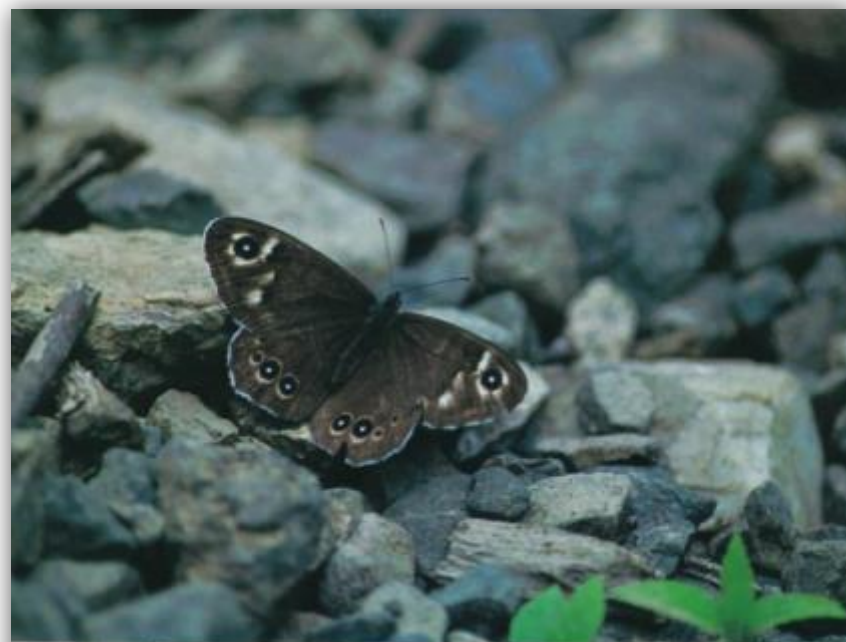
はじめに その2

その後大学(虫研)を卒業し夕張の高校に勤めた頃もエゾツマは私の手におえない蝶のままでした。1986年に出版した「道新本」の写真ページはすべて渡辺御大のものを使わせていただきました。(右写真)本文記述もバイブルと渡辺さんからの情報から書いたものになってしまいました。

これではいけないと富良野に転勤になってから、大学時代に先輩丹一夫さんから聞いていた芦別岳の記録の再発見に数回挑みました。山部の登山口から旧道コースで岩峰を目指します。夫婦岩というあたりが生息地ではないかと踏んで、ユーフレ沢を登り詰め、崖下をウロウロしましたが、結局ダメでエゾツマは憧れの高嶺の蝶のままでした。



芦別連邦 →が夫婦岩



▲小石上の♀ (1984.8.5 日高管内日高町チロロ川)



▲食草根元の終齢幼虫
(1985.5.21 同上)



▲岩壁に下がる蛹
(1980.6.8 同上)

そろそろ本編 幼生期アタック

尻岸馬内林道: 2014年5月

時は経って2014年「完本」に取り組むことになった私たちは高嶺の蝶を何とか落とさねばなりません。成虫はともかく幼生期は雲をつかむ状態です。近年地元富良野と芦別市との境界にある尻岸馬内林道でエゾツマが採集されているので、まずそこに行ってみました。2014年は惨敗。翌年年は相棒も参加しリベンジしますが、雪解け後林道が崩壊してしまい敗退。場所を日高の有名ポイントに絞り石黒・芝田氏も参加しチャレンジを続けます。

調査の写真を3枚並べます。いつもこんな感じで崖をよじ登ってアタックします。狙いはやはり食痕です。以前飼育した時の台形～斜め切りをイメージし、緑色系の幼虫だから葉に付いているはずと信じて探し続けました。そしてついに2015年8月8日卵と若齢幼虫を発見することができました。脚立の写真の時です。やりました！



日高T林道: 2015年8月



日高T林道: 2015年5月

2015年8月8日 あれこれ

さて8月8日のことですが、食痕目当てに探したわけですが最初に出会ったのが②の幼虫です。小さなヒメノガリヤスの株。細く伸びている葉先に食痕がありますね。そこに2齢(?)幼虫が付いていたのです。卵も同じような小さな株①で見つけました。ヒメノガリヤスの株は崖のあちこちに張り付いているのですが、見つかるのは大きな株ではなくごくごく小さな株です。相棒が見つけて撮影しているのも、ごく小さな株というのがわかると思います。小さいことに何かメリットはあるのでしょうか？

見つけた株の位置



①: 卵



②: 2齢(?)幼虫



こんな小さな株で見つけられます

日高の探索その後

2015年は「完本」取材のため相棒も含めフル稼働状態で、エゾツマを落とすことができました。幼虫のその後8月26・29日に現地で追加観察、持ち帰った雌から採卵も行い飼育が始まります。幼虫は4齢で蛹化その年に2化が羽化しました。これらの成果で結果完本のページを埋めることができました。この年から日高通いが今でも続いています。北海道らしくないとにかく深山幽谷。エゾツマの他にも魅力的なチョウに出会うことができる貴重なマイ・フィールドになりました。飼育の写真を並べてみます。



終齢幼虫 8・31



♀のエサやり



ケースで採卵



8月26日の3齢



蛹化 8・27



黒っぽい蛹 9・11



羽化 9・11

成虫の行動① 2015年7月11日 初めての出会い

話は前後しますが「完本」取材の2015年はもちろん成虫の行動を捉えようと頑張りました。何を隠そう私はエゾツマ君のお姿は前年に尻岸馬内でちらりと目撃しただけでカメラに収めるには至っておりませんでした。まずはそのお姿をと7月11日に相棒と向かいました。林道沿いに食草が生えている崖を出てくると車を止めてはキョロキョロしながらズンズン奥に入っていきます。すると陽射しが入った崖の上部に止まっているエゾツマ君を発見。心臓が久しぶりに高鳴りました。

7時14分ついにカメラに収めました。(①)少し下に降りてきたのでパチリ(②)採れた画像を確認すると♂と♀。結構きれいです。しかしあまりにも遠すぎる。先に進むと先入りしている芝田さんと合流。彼はもうかなり見て撮影したとのこと。その後もあまり下に降りてくれないので、満足な写真は撮れませんでした。芝田さんの撮ったのを見せてもらおうとびっくり。飛翔写真や産卵写真がばっちり捉えられている。うーむ。流石の凄腕なのでした。とりあえず「完本」を飾ることができたのでした。メデタシメデタシ。



①: 崖に止まる♀



②: キリンソウで吸蜜する♂



綺麗な♂



飛翔写真を撮影する芝田さん

2015年以後①島ノ下

エゾツマ君に会うための日高通いは2015年以降今も続いています。地元の尻岸馬内での観察も続け2016年に初めて1♀に出会うことができました。その後2020～21年には複数個体観察することができ、少ないながら生き延びていることがわかります。この林道も土砂崩れが続き、奥の核心部分には容易に近づくことができません。というのも車を降りて奥に入るのはヒグマの危険が増すためです。とりあえず、崖の雰囲気と証拠写真を載せておきます。

尻岸馬内林道の生息地



タンポポモドキで吸蜜する♂ 2020・8・9



ヨツバヒヨドリで吸蜜する♀ 2020・8・9



2015年以後② 島ノ下での取り組み

エゾツマ君の観察で未解明なことがあります。越冬についてです。「生態図鑑」には「越冬時期に・・・幼虫は体色が褐色～淡紫色になり・・・枯草の根元で越冬・・・」という記述があり、本当かどうか確かめたいのです。飼育では全部2化が出てしまいますので、なんとか野外状態で見たいと2020年に尻岸馬内で放飼して観察してみることにしました崖の食草の株にネットをかけその後越冬まで見たいと考えたのです。7月31日に3齢幼虫をセットしたのですが、その後ずんずん成長して9月1～2日に蛹化、9月9日の朝に羽化してしまいました。休眠のスイッチはなぜか入らなかったようです。その後室内で案条件で育ててみると10月後半に3齢で食べなくなりましたが、越冬に失敗してしまいました。日高でもマークして追跡したりしていますがいまだに越冬については謎のままです。



その後のあれこれ 産卵

＊「北海道の蝶の生活史 図鑑蝶好きの12か月」(2025北大出版会)

最近の話といっても2023年の話ですが、やっと産卵行動を目撃できました。＊新刊本にも紹介していますが芝田さんが2015年に撮影して以来相棒とチャレンジしてきたのですが、なかなか産卵には出会えません。♀は吸蜜を終えると崖をなめるようにゆっくり飛び回り産卵場所を探します。首がいたくなるほど上を眺め続けているのですが、そのうち崖に生えているキンソウで吸蜜に入ったり、日向ぼっこの休憩に入ったり、どこかに飛んで行ってしまったり。前に書きましたが卵や若齢が見つかるのはヒメノガリヤスのごく小さな株。そんな株をじっくり品定めしているようです。やっとのことで目撃できたのが下の写真。2023年8月1日。300mmのレンズでトリミングしてもこのくらいの高さの株でした。もっと近くで見たい！



① 崖の食草を見つける



②: 腹を曲げて産卵

まだ続くフィールドワーク

気品ある地味チョウ、エゾツマの棲む尻岸馬内も日高の沢も自然度が高くフィールドワーカーにとっては恐ろしくも楽しい場所なのです。ヒグマ・エゾシカ・キツネたちは平気で歩き回り、溪流を覗くとアメマスやオショロコマが群がっています。新刊本にも書きましたが、ここでの寝泊まりは最高です。ギョウジャニンニク・ウドやキノコといった山の幸、大イワナやオショロコマの川の幸をいただきながら、越冬前後の生態解明をめざし、これからもフィールド通いが続きそうです。





To be continued.